

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第二十九回 英米は日本の台湾統治をどうみたか

児玉・後藤による台湾統治の基盤形成の時代を
欧米がどうみていたのか。「タイムズ」(ロンドン)
の記事がある。記事は明治三十七(一九〇四)年
九月二十四日付である。同一の記事が、翌日二十五
日の「ニューヨークタイムズ」にも掲載された。辣腕
の特派員記者による精細な台湾観察によって書
かれた記事にちがいない。

領有から十年足らず、児玉と後藤の着任から六
年余のわずかな期間において、日本は台湾におい
て何を成し遂げたのか。第三者の評価に耳を傾け
てみたい。

論説のタイトルは、「日本人によって劇的な変化
を遂げた台湾という島―他の誰もが成し得なかつ
たことを数年で達成した驚くべき成果―他の植民
地国家に対する一つの教訓」(SAVAGE ISLAND OF
FORMOSA TRANSFORMED BY JAPANESE
Wonders Worked in a Few Years With a People That
Others Had Failed to Subdue / A Lesson for Other
Colonizing Nations)である。以下、抄訳。

日本が台湾という島で試みた最初の実験に、わ
れわれはきわめて大きな関心を寄せねばならな
い。台湾は、これまで他の国家のいずれもが手の施

しようもなかつたほどに多くの困難を抱えていたからである。

スペインとオランダは台湾の植民地化に乗り出したものの、惨めな失敗に終わった。中国は台湾の地をほとんど荒蕪地のままに放置してきた。フランスと英国は台湾を領有する力を十分に擁していたものの、台湾の島の内部に足を踏み入れようとはしなかつた。

寛容な法治 日本に成功をもたらした諸政策には次のようなものがある。何より日本は住民の慣行を尊重し、文明化を強制するのではなく、文明化の方向に彼らを寛容に導くよう努めた。たとえば、住民を武装した悪漢どもから守り、また火災、洪水などの自然災害から住民を救済するため、かつて中国人によって組織された「隘勇」(自警団)はこれを維持する一方、同時に日本の優れた法律をも導入した。日本の法律は、原住民に対してはこれを適宜、修正した。文明の欠如のゆえに、文明化された状態がいかなるものなのか、文明化

のためにはなぜ法律の尊重が必要なのかを理解させることが容易ではなかつたからである。

アヘン吸引慣習の矯正 台湾ではアヘン吸引の習慣さえも長らく放置されてきた。日本はアヘン取り引きを政府の専売とし、思慮深くも専売によって得られた収益はこれをアヘン吸引者数を漸減させるための費用として用いた。医師によって認定されたアヘン患者以外は吸引を許されず、患者がアヘンを手に入れても彼らは厳しい監視下におかれた。政府はアヘン供給を統制し、アヘン吸引者は特別認可を受けた取引業者からしかこれを購入できないようにした。

日本政府は、原住民の宗教や慣習に干渉して、彼らの感情を傷つけたりすることはなかつた。日本の統治ルールにしたがうことが、彼らにとって明らかな利益であることを実証しつづけた。

第一に、法を遵守する者は盗賊どもによる暴力や虐待から守られ、住民には公正な政策のもとでの自由を享受できるようにした。第二に、住民の

福利のためにも尽力した。

優れた学校制度の導入

日本は住民に初等教育を施すだけでは満足せず、野心的にも自国が与え得る最高のものを台湾に与えようとしている。そうして、日本は住民に対し医学校と日本語学校、さらに師範学校をさえ設立した。

台湾における医学校は、台湾の学生に近代科学と医療方法に関する正規の教育を施す、極東における唯一の学校である。現在百五十人の学生が優秀な日本の教授たちのもとで医学を学んでいる。

道路網の建設

日本は、台湾島の発展基盤形成にとっての重要性に鑑み、全島の多くの場所を選んで計画的に道路を建設している。同時に、日本政府は鉄道網の包括的な建設計画を図面に落とし、日本のような小国にとってはとつともないほどの金額を鉄道建設に注ぎ込んでいる。

日本人が台湾にやってきた時点では、台湾の地場産業はきわめて不十分な状態にあった。豊かな土地を科学的かつ綿密に耕作する方法は知られて

おらず、現地住民を助ける者は誰もいなかった。彼らはただ天の恵みに頼るだけだった。米の二期作、三期作さえも可能であったにもかかわらず、農民の収穫はその労働投入分を超えることはなく、収入はまったく微々たるものであった。

日本人によって導入された耕作方法の改善により、米、茶、砂糖、薩摩芋、甘蔗、麻、ウコンなどの生産が急速に伸びた。台湾の森林資源は膨大なものであったが、その利用はまことに不十分であった。日本人によって導入された改善策の結果、樟脳生産は新たに飛躍的な伸びをみせた。かつては、鉱業生産もい加減な方法に終始し、そのために労働を最大限投入しても得られる果実は最小限のものでしかなかった。

日本人は我慢強く、寛容な教化によってすべての産業に改善方法を持ち込んだ。農業ではより多くの収穫が可能となり、森林は科学的に開墾され、数百万の樟脳の幼木が適地に植樹され、鉱山業もまたこの十年のうちに実に驚異的な進歩を遂

げた。

銀行・通貨システム 台湾の貿易と産業の改善は、当然ながら、銀行組織ならびに通貨制度の改善を必要とする。かくして、台湾銀行が全島の中央銀行として確立され、民間銀行の事務所が各地方の要所に開設された。

郵便貯蓄銀行もまた開設され、満足すべき成果を取めた。台湾の通貨も改変された。台湾の住民が交換手段として用いていたのは、中国とまったく同様、硬貨ではなく地金じがねであった。重くて大きな物の商取引をするのに嵩かさの張る銅銭を用いることはほとんど不可能であった。日本は、このまるで使い物にならないシステムを、日本の現代的な金融システムに転換した。

実際、日本は、台湾にお金を湯水のように注ぎ込んだ。日本は、赤砂糖、白糖、ガラス、紙などを生産する工場をつくり、そのために日本は望み得る最高の人材の多くを管理者として台湾に派遣した。この開明的な政策の果実を、日本はいずれ

の時期に必ずや掌しょうわ中ちゆうにするに違いない。

台湾が日本の統治下におかれるようになって以来、たかだか数年しか経過していない。それにもかかわらず、この間に実現された経済成長は衝撃的なものであったといわねばならない。住民の享受する繁栄は、樟腦の専売、政府の諸事業税、さまざまな種類の徴税に由来する政府収入の増加によってもたらされたが、不正な手段が用いられることは一切なかった。

それゆえ、台湾の人口が、台湾の資源開発とともに急速に増加したのはごく自然なことであった。明治三十年に台湾の人口は二百四十五万五千三百五十七人となり、明治三十六年には三百八万二千四百四人となったのである。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ、慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、成長のアジア、停滞のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、開発経済学で大平正芳記念賞受賞。九〇年、西太平洋の時代でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇二年、正論大賞。